

宮城の「鳴子系」や青森の「津軽系」など、東北には10ものこけしの産地が存在する。盛岡こけしもその中のひとつで、「南部系」と呼ばれている。

頭がはめ込み式で、クラクラと首が動くのがほかにはない特徴。頭のかたちは、山の実に因んで「どんぐり」、「くり」、「くるみ」の3種ある。模様をほどこさない全く無地のもは「キナキナ坊」といい、これが盛岡こけしの原型といわれている。

盛岡こけしは、県北浄法寺出身の木地師・安保家によって代々伝えられてきた。現在は、その流れを汲む田山和文氏と娘の和泉氏が、製作のほか、体験教室を開いたりと活躍している。

観賞用にお土産として購入されることも多いこけしだが、昔は子どもの遊び道具として使われていた。帯で背中にくりつけ、ままごとをする光景もよく見られた。また、無地のキナキナ坊は、赤ちゃんのおしゃぶりとして使われ、これをしゃぶらせると丈夫な歯が生えるといわれていたそうだ。

盛岡こけしには、白色できめの細かいミズキの原木が使われている。丸太を板状に切り分け、1年以上にわたって乾燥させる。1～



もり
おか
ブランド
物語



3月の寒い時期に始めるのが、空気が乾いていて最適なのだという。

作り方は、ろくろ挽きに板を取り付け、頭、胴と分けて削っていく。軽く首が動くように、頭部から出ている突起と、はめ込むための穴の大きさを調整するのがポイント。その後の絵付けも神経を使う作業だ。決まったかたちに描くのだが、同じように顔を描いていても、作り手によって表情に違いが生まれるのだという。1本ずつではなく、工程ごとにまとめて製作しているが、1日に作ることのできる本数は大体20本くらいだそうだ。

伝統こけしに加え様々なかたちが登場し、今では約100種にも及ぶ。最近では、こけしの頭を利用して細工をした干支のマスコットが人気だという。

首がカタカタと振れる、可愛らしい動きが盛岡こけしのいいところ。観賞用もいいが、昔にならい子どものおもちゃとしてどんどん触れてもらいたい。

盛岡特産品ブランド認証委員会

〒020-0055 岩手県盛岡市繁字尾入野 64-102
代表電話 019-689-2201 ファックス 019-689-2212